
あい らぶ

後藤 萌愛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あい らぶ

【Nコード】

N7823M

【作者名】

後藤 萌愛

【あらすじ】

愛空高校に入学する竜宮真麻と上山楓子。

期待に胸をふくらませ入学。でも初日からボイコット。

男の子二人を追いかけて屋上へ……。

男の子の名前は翼と海里。

幼なじみと同じ名前の男の子に真麻は……。

そしていきなり真麻のもっている重病、心臓病の発作が！！

真麻と楓子。翼と海里。四人で繰り広げるせつないラブストーリー。

く春く

く春く

春がきた。桜ふぶきが舞うなか私、竜宮真麻は愛空高校に入学する
ぴちぴちの高校一年生。

新しい高校生ライフに期待の胸をはずませている今日このごろ。
新しい勉強に新しい友達、新しい出会いの予感がする。

にこにこしながらばんから写真とひとつのこびんを出した。

「海ちゃん。今、なにしてるのかな・・・。」

会いたいよ・・・。約束・・・、覚えてるよね??」

一人写真に話し掛ける自分。写真に写るのは私の幼なじみ、村田海
里。

ちっちゃいころからずっと一緒に兄弟みたいとも言われたほどだっ
た。

でも、海ちゃんとの別れは突然にしてやってきた。

「遠くに行くの。だからまあちゃんとはお別れしなきゃ。」

親の都合で遠くの県に移動することになった海ちゃん。

そのときはずっと一緒にいられると思っていた幼いあたしはショッ
クがとても大きかった。

分かれる寸前海ちゃんが渡してくれたのがこのブルーのこびんだっ
た。

「まあちゃん、いつか必ず会おう。そのときまでにこれを大切に持
っていてね。僕のお守りだよ。」

お母さんがきれいなブルーの色をしてて海みたいなこのこびんを
買ってくれたんだ。

これを僕だと思って待ってて。さみしくないでしょ?」

すきとおった瞳で海ちゃんは笑顔で言ってきた。

その笑顔は今でも忘れられない。幼いころの淡い約束。

ブルーのこびんを太陽に照らしていたら向こうに知っている顔が映った。

上山楓子。あたしの親友。楓子も小学校からの長い付き合い。

「まーあーさー。何見てるのー？」

長い茶髪のロングの髪の毛を桜ふぶきになびかせながらくりつとした目で聞いてきた。

「海ちゃんのこびん見てたの。」

楓子にはやりと笑った。

「真麻はほんとに海里君が好きだね。」

ニヤニヤ笑いながらあたしをちやかす楓子。

「からかわないですよ。」

精一杯の対応をする私。

「ほんとのことでしょ？」

楓子が釘を打つ。

「うつ……。ほんとです……。」

やっぱ楓子にはかなわないな。

「てかさ……。」

楓子がなにやら重そうに口を開けた。

「真麻。心臓大丈夫？」

ドキッ 楓子……。

そう。あたしは心臓病を抱えている。医者からは20歳にはなれないと診断された。

それほど悪化してきているのである。

毎朝と毎晩。薬をたくさん飲まなきゃいけない。とても苦しい毎日でも楓子がいたから乗り越えられてきた。いつもはげましてくれていた。

それから海ちゃんにも……。

「だいじょぶ、だいじょぶ。」

このごろ軽く動いても発作が少なくなってきたし。」
笑顔で言う。もう誰にも心配はかけたくない。

「そつか・・・。よかった。」

複雑そうな顔。うすうす嘘に気づいているのかな。
お互い黙り込んでしまった。

キンコーン カンコーン

「やっぱ。鐘なっちゃったあ。今日は入学式だよ！！遅れられない。
い。走るよ、真麻！！」

いきなりなにかが起きたように声をだした楓子。

「了解。」

つていつても心臓次第。発作が起こらないことを祈りつつ軽く小走りに走るあたしとあたしの荷物を持って学校までダッシュする寸前の楓子。

初日早々、大量の体力を使ったあたしにはこれからなにが起こるかなど予想もつかなかった。

入学

入学

やつとのことで学校についたあたしと楓子。幸いにも発作は起こらなかった。急いで朝の準備をし入学式会場へ……。と思ったときに入学式会場の体育館と反対方向に行く男の人2人組み。

「初日早々ボイコットすんのかな？」

楓子が興味ありげに聞いてくる。

「よくやるね。って、早く行こつ。遅れるよ。」

焦っているあたしと反対ににんまりしている楓子。もしかして……。

「ねつ。うちらもボイコットしよーよ。」

言うと思った。楓子はたぶんあの男の人たちと話をしたいんだな。

「えー。でも、初日ボイコットは……。まずいんじゃない？」

心配性な性格のあたし。と反面にやる気まんまんの楓子。

「いいじゃん。いいじゃん。あの男の子たちちよーかつこよかったよね?!」

「そうかなー。」

あんまり顔は見えなかった。私はその前に入学式がきがりだった。「行こつ。決定ー!!」

無理やりあたしをひっぱって連れて行こうとする楓子。待ってえええええええつ。

楓子が走って追いかける。くっ……。ぐるじい……。

楓子が勢いよく屋上のドアを開ける。

「あつ。いた！」

「へっ?!」

あやふやな答えしかできないあたし。まずすごく苦しい。

「あの一??」

男の人たちに楓子が話しかける。

「すごいですね。初日からボーイコットって。」

男2人は不思議そうな顔で見ている。

「あんたら誰？」

茶髪でピアスをしている男が言う。なんか、かわらないほうがいいよな……。

「えっと……。あたし上山楓子で、この子が竜宮真麻ちゃんです。一年だよ。よろしくね。」

あなたたちの名前は？？何年生ですか？？」

楓子が自己紹介をしている。立つのがつらい。

「俺が日比野 翼。で、こっちの寝てんのが椎名海里。一年生だよ。」

えっ？？海里？？」

「えっ、海里？！」

楓子もびっくりしたのだろう。

「う……。んん……。」

ドキッ 起きた？

「ねみ……。ん？誰、あんたら。」

海里ってという人が聞く。

きれいな瞳。ふわふわした髪。でも黒い髪。

「あたしは上山楓子て言います。この子が竜宮真麻ちゃん。一年です。」

「ふーん」

興味がなさそう。

「海里さんってゆうんですね。あたしたちの友達にもいるんですよ。ねっ。真麻……。って。」

真麻顔色悪くない？？」

「えっ……。」

やばい発作がかつてる。息がでな……。い。視界が狭くなっていく。

フラッ

「ちよつ。真麻ー!!」

トン・・・ 何かによっかかってる??

「大丈夫か??」

黒い髪。きれいな目。海里さん?

でもこの手のかんじは違う。海ちゃんじゃない。

「海ちゃ・・・じゃな・・・い。離れ・・・て・・・。」

精一杯の声。ふりしぼって出す声。

「あんた何言ってんの?」

ぼやけてくる。あつ、こりや倒れるな・・・。

ボタンっつ

「真麻ー!ー!ー!??」

く 誓い く

く 誓い く

「まあちゃん。虫取りに行こ。」

海ちゃん・・・。待つて・・・。

「まあちゃん。ほらっ、早く。」

海ちゃん。海ちゃん。待つて。

「待つて!!」

「はっ?!」

あれ・・・? 白い部屋。

「ここは・・・。」

「保健室だよ。ごめんね真麻。あたしが無理やり屋上にひっぱったからあー。」

「大ジョブ大ジョブ。」

楓子が隣に泣きながら座っている。その隣に・・・翼さんだっけか? そしてあたしの反対の隣に海里さん。

「海ちゃんは?」

「海ちゃん?!」

不思議そうな顔をする男二人。

「海ちゃんってゆうのは田村海里ってゆうっちらの友達で・・・。」

楓子が途中まで説明して口を閉じる。

「あたしの幼なじみだよ。」

あたしが付け加えて言う。

「へー。」

そして沈黙。誰も話さない。

するとずっと我慢していたように海里さんが口を開いた。

「お前・・・。なんか病気もってんの?」

ギクッ どうしよう。言うべきかな? でもひかれたらどうしよう。

・・。

「えつと、その。」

一生懸命言葉を探すあたしに海里さんが口を開いた。

「無理して言わなくていいから。」

「うん。」

気を使ってくれたのかな？あんがい優しい人なのかも。

「あのつ。海里さん。」

「ん？何？つてか”さん”やめてくんね。”海里”でいいから。」

海里？！呼び捨てかー。なんかいきなり恥ずかしくなったな・・・。

「じゃあ、海里。ありがとね。優しい人なんだね。」

気を使ってくれてほんとに助かった。

「あつ、うん。」

あれ？照れてる？

「あつれれ」。海里君照れてんじゃない？」

楓子がいたずらに言う。

「うつせ。」

顔をすぼめる海里。かわいいな。

いずれ海里にすっかり気持ちを持って言える日が来たら言おう。この病気を・・・。

そうあたしは自分に誓いをたてた。

く友達く

く友達く

保健室から帰ってきたあたしたちを待っていたのは・・・説教だった。

「あなたたちは入学早々集団ボイコットをしたらいいですね。まったくうちの学校にそのような生徒

がいることは大きい恥なのですよ？」

愚痴愚痴、ガミガミ言ってくるおばさん先生。うるさい。何時間たっただろう？今、一時間目終わったところかな？

まず何時間もの正座にあたしの足は悲鳴をあげていた。

きつつく。隣には楓子、海里、翼さんの順に座っている。みんなきつつく。

特に楓子。めっちゃ足がプルプルしている。

「じゃ、今日はこれくらいで我慢してあげましょう。もうしないでくださいね。」

といって、ガミガミばあは指導室から出て行った。

「うつせんだよ。クソばあ！！」

「来んなもう！！」

3人とも口ぐちに言っている。

あたしのせいだよ。あたしが発作なんか起こしたから・・・。

「ごめんね、みんな。」

謝るあたしに対してみんな目を丸くする。

「なんで真麻ちゃんがあやまんの？」

「だってあたしのせいで・・・。あたしが倒れたりしなければ。」

「いっていつてく。全然！！大ジョブ大ジョブ。」

「そうそう。ここの学校の目付とくせんこうもみつかったしね。」

「ラッキーラッキー！」

みんな励ましてくれてる。

「ありがとね。」

涙ぐむあたし。

「ってか、真麻ちゃんさー。なんで海（海里）のことは呼び捨てなのに俺んことは”さん”づけなの??俺んことも”翼”でいいよ。おっけー?」

「うん。つば・・・、つ・・・。翼。」

「なあに〜。」

うわ〜。絶対今顔赤くなってる。恥ずかしい。

「もう!翼と真麻でいちゃいちゃしないしな〜。暑いぞー。」

楓子からのブーイング。

「いちゃいちゃって・・・!!楓子!!!!!!」

「顔赤いぞ〜。ん?真麻ちゃん?」

ぶつくりふくれたほっぺで楓子を睨む。

「もう〜。」

高校生になって初めての友達ができた。

人生の中でベスト3にはいるほどの幸せだった。みんな笑顔だった。

「昼」

「昼」

「まーあーさー。」

教室の窓から親友の声がする。

「楓子！もうそっちの教室の授業終わったの？」

「いや」。抜け出してきちゃった。こっちの先生甘いんだもん。といって、舌をペロツとだしていたずらな笑みをうかべる楓子。

こっちまだ授業終わってないからー！！

「こらっ。上山さん。自分の教室に戻りなさい！！」

えー。先生つつこむところこそ？！まず、抜け出てきたのが問題っしょ？！

「はーい。じゃあ、見てます」

全く楓子はー。

「楓子ちゃん。俺も抜ける」。

「俺もおれも。」

「一緒に遊ぼ？」

なんやかんや言ってみんな抜け出したらしい。高校生だもんね。

「じゃー、みんなで今日の昼はファミレス行こっか。」

「さんせーい！！」

男子たちがはしゃぎだす。女子たちはちょっと迷惑そうだ。

楓子は男子からの人気が高い。

楓子はかわいいから納得できる。

「ねー。竜宮さん。」

前の席の子が話しかけてきた。

「あの楓子って子、ちょっとうるさくない？」

元気なのはいいことだと思うけど……。今勉強中よ？」
ですよねー。みなさんそう思いますよね。

正直クラスの半分はそう思ってるみたい。

一回楓子を帰らせるか。

「楓子ー。まだ勉強終わってないからいったん帰ってー。」

「なに？真麻ノリ悪くない？いいじゃん。ちよつとくらい。ねー。」

田岸君。」

「うん！」

どうやら隣にいる男子のことらしい。

どっちでもいいけど、さっきの楓子の発言にクラスの女子のはらわたはにくりかえる寸前だろう。

こりゃ、やばいな・・・。

「まず、楓子帰ったほうが・・・。。。」

恐る恐る聞いてみるけど聞こえてないっぽい。
すると楓子が、

「そーだ！真麻もファミレスいこーよ！！」

はあっ！？そうきたか・・・。

「あたしいーや。パスするよ。」

あまり男の子たちとはかかわりたくないしね。

「そっかー。じゃあ、翼と海里さそおっつと。」

楓子は大きい声で言った。なんかもう勝手にしてくださいって感じだなー。

「えつと・・・。翼がE組で・・・。海里が・・・。あつ、いたー！！」

そう。海里はあたしと同じクラスなのである。

「海里。一緒にファミレスいこーよ。他の男子も一緒だしさー。ねっ？」

楓子が言う。海里はどうやら寝ていたらしく、機嫌が悪そう。

「あーつと。真麻は行くの？」

えっ？なんであたしに聞くの？

「えっ、行かないけど・・・。」

「んじゃあ、俺もパスー。」

と言ってまた寝てしまった。

楓子はなにか不思議そうな顔をしているそれもそうだろう。
なんでわざわざ海里はあたしの有無をきいたのかな？

きまぐれだよな。海里も昨日怒られてあんま友達作る時間できなかったっぽいし・・・。

「じゃあ、次の教室いこつか?!」

そう言つて楓子は台風のように去つて行つた・・・。

いやー。でかい台風でした。

「竜宮さん、いろいろふられてたねー。大変だったでしょ?」

また前の席の子が話しかけてきた。

「そうでもないかな。慣れてるし。」

楓子とは長い付き合いだしね。

「そうなの?」

「うん。」

心配してくれたのかな?

「ありがとね。気つかつてくれて。」

「大ジョブ大ジョブ つか、竜宮さんって呼ぶのもなんか慣れないから”真麻”って呼んでいいかな。」

あたしは”葉月陽菜”よろしくね!!」

いきなりの自己紹介にとまどうあたし。また新しい友達ができた。
うれしいな。

「よろしくね、陽菜。」

「うん。よろしくー。」

キンコーン カンコーン

昼の時間だ。買いに行かなきゃ。売り切れちゃう。

足を急がせるあたしの横を大勢の生徒たちが固まりになって通り過

ぎていった。

「あれ？楓子かな？」

ファミレス軍団だったらしい。にぎやかそーだなー。お金誰払うんだろー？

と疑問を浮かべているあたしにショッキングな言葉が耳に入ってきた。

「はい。もう、昼の食べ物売り切れだよー。」

えっ?! まじで?! ああああ~~~~。

昼の給食なしなちゃった。腹がすいては戦はできぬ……。あたし午後大丈夫かなー？

ただでさえ弱い体なのに。

とぼとぼ歩いていると後ろから声がした。

「まーあーさー!!」

振り向いてみるとそこには海里がいた。

「一緒に飯食べよ。」

そういう海里の手には野菜がたくさん入ったやきそばパン。心臓病の人にとって必須なものが全部入っている。

「あれ？お前、飯は？」

「取り損ねちゃったよおお。」

目をつるつるさせて言うあたし。それに海里は

「じゃ、一緒に食べよ。」

「へっ。」

一緒に?! 別にいいよね? 好きとか感情ないしね。

「じゃあ、あそこすわろっか。」

「うん。」

二人となり合わせに座る。なんか緊張しちゃうなー。

「ほれっ。」

つと言ってやきそばパンの片割れをあたしに渡す海里。

「ありがとう。」

パックつと口にする。

うわ。おいしいな？午前ぎりぎり頑張れそう。

「お前、幸せそうに食べんな。」

「へへ。そうかな。」

にやけてしまう。

「だっておいしいんだもん。」

つい、本音がでてしまう。

「大げさなやつ。でも、かわいいな。」

ゴックン　丸のみしてしまった。だって海里がいきなり変なことを言うから。

「何言ってるの。あたし全然かわいくないし。むしろちょっとお荷物系かな？」

自分で言ってる悲しくなってくる。でもほんとだもん。心臓病でたくさんの人たちに迷惑をかけてしまった。

「なんでお荷物なの？」

ドキッ　まずった……。変なかんじに聞こえたかな？

「いっつもドジってことだよ。ほら、この前だって倒れたじゃん？」

「そっか……。」「

やっとか切り抜けた。ごめんね嘘ついて。いつか正直に言うから。

キンコン　カンコン

昼の終わりの鐘が鳴る。

「そろそろ行くか。」

「あつ。うん……。」「

なんとなくの反応しかできなかった。

これから海里とは難しい関係になっていくのかもしれない。

く 昼く (後書き)

なんか長い分になってしまい構成もごちゃごちゃですが読んでいただけたら幸いです。
お願いします。

、放課後、

放学后

キンコーン カンコーン

「ふい／＼やつと終わつたよー。」

なんとか高校生活に慣れ、最近はだらだらの毎日。

「まーあーさー。一緒かえろ。」

楓子が大声で呼ぶ。

「ちよつと待っててー！」

そそくさと急いで準備する。

「あつ、これから海里と翼とあたしと真麻でカラオケ行くから」

「うーん！」

・ ・ ・ っ！？なんだってえ？！カラオケええええええ？！

ただでさえ昼、海里とはきまづくなつたばかりなのに……。

「楓子！ それって絶対？」

おそるおそる聞いてみる。

「絶対？」

「ですよー。行かないっていつも楓子は無理やり行かせるだろう。」

また発作が起こってもごめんだ。

「よし。行くか。」

準備ができたところで楓子に声をかける。

後ろにはもう翼がスタンバってる。行く気まんまんだなー。

「あとは海里だけだね。」

そういうと楓子が海里を呼んだ。

「海里ー！カラオケ行くよー！」

「はあ？！」

海里も知らされていなかったらしい。

「やだよ。」

と言ってあつかんべーをしてにらんでいる。
でも強制的に楓子が引つ張ってつれてくる。
海里はすごく嫌そうな顔をしている。かわいそー。
・・・っと、不意に海里と目が合ってしまった。
あたしは反射的に目をそらしてしまう。
ばかー！。あたしのばかー！。
なんで目そらしたのよお。と自分に怒る自分。
「さ。行こっか？」
あたしが怒ってるときに楓子と言う。
あたしは楓子の後について歩いて行く。
どうしよおお。カラオケ。

カラオケ店についた。大量に電気がついててまぶしい。
「高校生4人で！」
楓子と言う。楽しそうだなー。
指定された部屋に入る。さっそく楓子がオーダーを頼む。
「じゃ、なに歌うー？」
あたしはひっそりはじっこで過ごしていよう。
「あたし初めに歌うー！」
楓子がマイクを使って大声で言ったからすごく頭にひびいた。
「それでは一番上山楓子いきまゝす」
楓子が歌いだす。海里はなんとなく寝むそう。翼はタンバリンをたたいている。

歌っていたら一時間半くらいだった。あたしはどっやら眠っていた。
「ん……。ねむい。」

目をこすりながら開けると目の前に海里が。

「ええええええ！！！！？？？？」

「何？」

涼しそうな顔で海里はこっちを見る。

「あれ？楓子たちは？」

「ああ。なんか帰った。金置いて。おめーが寝るからあきたんじゃねーの？」

「ふん。」

?!

とゆーことは今まであたしは海里と二人っきりで……。いつきに顔が赤くなるのが分かった。

「そろそろ帰ろっか？」

あたしが言う。海里は……。あたしの前に座った。

「なっ……。？」

すると髪に指を通してきた。

「なに？」

恐る恐る聞いてみる。

「いや……。触りたかったから……。」

ずきゅっつゅっつゅっつゅっつゅん

なにその言葉。なんでそんなこと言うのよ……。

「海里……。？かえ……。んない……。の??。」

「いやだ。」

海里が大きい声でそんなこと言うからびっくりした。

さつきから心臓バツクバク。体温20000度更新！やばいよおお。

ただでさえ心臓弱いのに。

「海里かえろ？」

あたしが立ちあがろうとすると無理やり座らせられた。

「へ？」

海里？どうしたの？

「お前さー。俺んこと嫌いなわけ？」

「え！？」

なにいきなり！！

「嫌いじゃないけど・・・、好きでもないし・・・。まあ、普通の友達」

なんて明るくいつてみたけど海里はあたしをずっとにらんでいる。

「友達か・・・。」

悲しそうに言う。どうして？ねえ、なんで？

またあたしは人を傷つけているの？

「俺は友達なんて一回も思ったことないんだぞ？」

え??

そう言うのと前かがみになってあたしに・・・あたしの唇に近づいてきた。

「え？海里？」

吐息が・・・。あたる・・・。

「やつ、やめて！！」

そう言つて海里を振り払つて外に飛び出した。

「どうして俺は我慢ができねーんだ？」

あたしは全速力で走る。走つてはいけないのに・・・。
。なんで？なんでキスしようとしたの？どうしてどうして・・・。

あたまのなかはどうしてばかり。

「うつ。」

いきなり呼吸困難に。

「ヒューヒュー。」

息ができない。苦しい。

「...」

く夢く

真麻・・・

真ちゃん・・・

誰？あたしを呼ぶのは誰？

海ちゃんなの・・・？

それとも海里・・・？

また遠ざかっていく・・・

離れちゃいやだよ・・・

そばに来てよ・・・

あたしを守ってよ・・・

真麻・・・自分に正直になりなさい・・・

どこからか声がする

正直？

あたしはただあなたにいてほしいだけなの

そばで見守ってほしいだけなの

じゃああたしが思ってる「あなた」って誰？

海ちゃん？楓子？お母さん？お父さん？

それとも．．．．．

その答えを早く見つけなさい正直な本当の自分の心に気づいてくるよ．．．．．

あなたは誰？あたしのこと知ってるの？

わたし？わたしは．．．．．

く病室く

がばっ！！

勢いよく起き上った。

今のは夢？

あの夢があたしに語りかけていたことってなんだろう？

正直？本当？

分からないよ・・・

考えれば考えるほど頭が痛くなる。

「うつうつ・・・。」

「大丈夫か？」

隣から声がしてびっくりして振り返る。

「へ？か・・・いり・・・？」

「何なさけねー声出してんだよ。」

あれ？なんで海里が隣にいるの？

てか、ここどこ？

白い部屋ー。

「あれ？ここどこ？」

「病院。お前覚えてねーのか？」

海里から問われる。

そういえば・・・あたし海里にキスされそうになってそれで一目散にダッシュで逃げたら呼吸が

苦しくなつて目の前が真っ暗になつてー・・・

どんどんよみがえる記憶にあたしは顔が赤くなつていった。

「すまねーな。」

いきなり謝りだす海里。

「俺・・・あんどき・・・さ、ちょっとおかしくなつてて・・・な。ごめんな・・・。」

声をふるわせて言う。

「大丈夫！全然！！気にしてないって。」

明るく言うあたし。だって海里があまりにもらしくない声を出すから・・・。

「ほんとか？」

「うん！」

満面の笑みで言う。

「でもさ……。」

がばちヨッ

思いつきり海里に抱きつく。

「ま……あ……さ……??」

海里が今どんな顔をしているのか分からないけどあたしはとてもすまなそうな海里を見ているのが

とてもつらいよ……。

「真麻。もう……無理なくていいよ?」

え?無理?無理なんてあたししてないよ?なんで海里はそんなさみしいことゆうの?

「海里?」

すると海里はあたしを勢いよく自分の体から離れた。

「え?」

驚くあたし。

「ごめん。今日は俺帰るね・・・。」

そう言い残して海里は病室から出ていく。

「待つて!! 海里!!」

あの広い胸がいきなり恋しくなる。どうしてだろう？

ズキッ

「いった・・・。」

突然のあたしの頭への頭痛。

「なに?! 今の頭痛？」

痛みはすぐおさまった。それにしても痛かったな。

この痛みの意味を知るのはまだ先のことでした・・・。。。

ゝ病室ゝ（後書き）

いきなり書き方を変えたので読みにくい点もあると思いますがあたたくよく読んでいただけたら幸いです。

いよいよ真麻の気持ちや海里の気持ちなどいろいろと複雑になってくるころです。

真麻ー。もう発作起こさないでくれー（泣

く正直にく

「はあ。」

登校中。大きいため息をつく。

「真麻なに朝っぱらから大きいため息ついちゃって。」

「楓子おお。」

「なっ、なに!？」

楓子がびつくりした目であたしを見る。

それもそのはず。今にもあたしは泣きだしそうだからだ。

「どうしたのー？」

やさしい声で楓子が語りかけてくる。

あの病室であつた出来事以来、あたしは海里と一言も口をきいていない。

逆に避けられてると思う。同じクラスなだけにもっと気まずいよ・
・・・。

「真麻。海里となんかあつたっしょ？」

ギクツ　ふ・・・楓子鋭い・・・。あたしって顔にでちゃうタイ

ブなのかなー？

「え？あっー……。はい……。」

「やっぱりねー。」

うんうんとうなずく楓子。

「何したの？」

「それがねー……。」

あたしが全部話し終わると楓子があることを言ってくれた。

「やー。複雑になってきてますねー。お二方。

でも、真麻。真麻はどうしたいの？海里と普通にまた話したいの？」

「そりゃー。話したいけどさ……。」。

「じゃあ自分の思ってることとか考えてることとか言ってみれば？正直に。」

「正直に??」

あたしが聞き返す。

「そう。正直に。今楓子がどう思ってるかとか考えてることを正直に伝えてごらん？」

そしたら海里の本当の心が見えてくるはずだよ？」

楓子………。今までずっと一緒だった楓子にはあたしの気持ちかわかつてるのかもしれない。

正直に……。か……。これは夢のなかで語りかけてた人も言うてたな！。

「うぬ？真麻ちゃん。なんか今考えてたでしょ？」

楓子が言う。うわー。感強っ！！

「あーっと……。なんかねー。あたしこのごろ夢見るんだー。その夢の人ね正直につて語りかけてくるの。でもすぐいなくなっちゃうんだけどね。」

あたしが話し終わると楓子が顔の色を変えた。

「ま……。あ……。さ……。それってつい最近見るんだよね……。？」

「うん。そうだけど……。なんかした？」

楓子の様子がおかしい。

「いや……。なんでもない……。？」

なにしたのかなー？

「ねえ。教えてよー。」

あたしがいたずらっぽく言ってみた。すると楓子が大きい声を出して言った。

「教えないって言ってるでしょ!!!」

ビクッ 楓子・・・？

「あ・・・。ごめん・・・。」

謝りだす楓子。いったいどうしたの？

すると学校が見えてきた。

「あ・・・。教室行くね。またね真麻・・・。」

「あ・・・。うん。」

きまづい雰囲気になってしまった。

ばかばかばか！あたしのばかり。楓子とまで気まづくなってどうすんの！！

でもなんで怒ってたんだろう？どうしてかな？

考えていると学校のチャイムが鳴った。

「やばやば。遅刻しちゃううー!!」

急いで教室にダッシュする。

ガラッ

教室に勢いよくはいる。遅刻ぎりぎり

かな・・・？

でも目の前にいる先生の目が光ってるのは気のせい・・・だよな？

「竜宮！！遅刻だ！！なにやってんだお前は！？」

怒鳴られちゃったし。ちろっと海里に目をやる。

一瞬目があつたけどそらされてしまった。やっぱり避けられてるし（

泣

でも楓子が言ってたように「正直に」だよ！がんばれ真麻！！

一人で考えていたら先生にまた怒鳴られた。

「竜宮！！！！人の話を聞け！！！！お前放課後職員室に来い！！！」

ええええええええええ

そんなのナシっすよせんせーいい！

あたしの心の叫びも伝わらず先生は朝の会を始めてしまった。

最悪だし。あたし今日絶対よくないことが起きるよー。てか、もう起きてるしね。

しょうがない。行くしかないかー。

そつ誓い忙しい朝をあたしは終えたのであった。

放課後・・・。

「だからお前はー・・・。」

さつきから先生のお説教を受けてる竜宮真麻です。

さつきって言うても1時間くらい経過してます。

もういいよおお。半泣きだし。

「まず。今日のところはこれくらいにしといてやる！！次はただじやおかないからな！！」

「はiiiiiiii！！！！」

「失礼しました・・・。」

と言って職員室から出る。先生のおにiiiiiii（泣

「あーあ。もう海里帰っちゃったよねー。」

またしても言うタイミングを逃してしまふ。ほんとついてないな！。

ベソをかきながら教室に荷物を取りに行くと誰かがいた。

「誰だろー??」

そう言つてのぞいてみるとそこには海里がいた。しかも寝てるし！

「何寝てんだかー。この人は。」

海里の近くに行つてみるとテンポのよい寝息が聞こえてきた。

窓から差し込む夕日に顔が照らされている。よく見るとまつ毛がながいし肌もしろい。

風にゆれる髪の毛は柔らかそう。触れてみたいな！。

ハッ 何考えてんの!? あたし！

思えば海里のことしか頭になくて………。

そう考えてると

「ん……真……麻……。まあ……。さ……。。」

「へ??」

今……海里なんて？

「あ。お・・・はよ・・・。」

沈黙が訪れる。早くこの場から逃げ出したい！！

「真麻・・・。あのさ・・・。」

海里がなにか言いかけた。それを遮るようにあたしが口を開く。

「あー。ごめんねー。海里のこと起こしちゃったかなあー。アハハ。もう帰るねー。ばいばーい。」

そう言って教室を飛び出した。

海里最後なんかあたしに言いかけてなかった？？

あたしのこと呼んでなかった？？

分かんない・・・。分かんないよお・・・。

「正直に」この言葉があたしの中でリピートする。

あたしの正直な気持ち・・・。それは・・・。

考えようとした思考を止めた。

「海ちゃん・・・。あたし・・・どうすればいいの??」

海ちゃん・・・会いたいよおお。」

涙が出てきた。あたしは静かな帰り道。

声をからしながら泣いて帰った・
・
・
・
・
・。

くまた夢く

「ま・・・あ・・・さ・・・。まあ・・・さ・・・。」

誰かがあたしをまた呼んでる。

あなたは誰なの？正直に・・・ってどうすればいいの？

「真麻・・・。。そろそろも・・・どる。き・・・おく・・・。」

記憶？戻る？何を言っているの？

「その時に・・・すべてが分かる・・・。真麻・・・。とわたしの・・・。」

すべてが分かる？この人は何を言っているの？

「真麻・・・。。正直に素直に自分に聞けば・・・答えは・・・。。。」

素直？？どんな声が遠くにいつてる。

待つて！！あたしはまだ聞きたいことがあるの。

置いていかないで！！！！

「真麻・・・。わたしはいつでもあなたのそばに・・・。。。」

待って――！！！！！！

く正直に 素直にく

ぱちっ

「あ．．．れえ．．．？」

また夢を見ていたみたい。でも夢の人はなおも絶えずあたしに話しかけてくる。

一体だれなの？どうして教えてくれないんだろう？

しかも記憶とかなんちゃらかんちゃら言ってたな。

うゝゝゝん。あんま思い出せないよお。

あれこれ考えているうちにもう学校に行く時間だ。

「あわわっ。遅刻しちゃうよお。」

あわてて支度をする。

「いつてきまーすーすー！」

パンを加えて家を出た。家の前に楓子がいた。

「真麻．．．。遅すぎ．．．。」

なんかご機嫌ななめな楓子。

「うわーん。ごめんね!」

謝ってから楓子とあたしは歩き始めた。

なんか昨日のこともありなんだか気まずい空気。

「あのさ……。真麻。」

いきなり楓子が口を開く。どうしたんだろう?

「ん?なに?」

「また……。あの夢……。見た??」

あの夢の話か。

「あゝあ。今日も見だよ。今日は正直だけじゃなくて記憶とか素直
ーとかなんか言ってたなー。」

あたしが思い返して話していると楓子また驚いたように聞き返して
きた。

「き……。おく!?」

「うん。そうなのー。なんか意味がわかんないけどねー。」

あはは。と話すあたしと反面に楓子はなんだか暗い表情。

「ふ、ふん。そっかー。」

「そうなんだよ。」

やっぱ楓子はなんか隠してる！絶対！！

「真麻。このごろ発作は大丈夫なの？」

ドキッ 心臓病のはなしか……。

「あ……。うん。大丈夫……。……。」

「そっか……。」

でもはつきり言つと悪化してきている。

はじめから20歳にはなれないって言われてたけど正直次の誕生日を迎えられるのかも危うくなってきている。

16歳のハッピーバースデー。家族や友達からお祝いしてもらおう！絶対生きてやる！！

かたく心に誓った。

「じゃね……。真麻。」

教室の前で楓子と別れる。あたしが教室にはいるうとしたとき楓子からいきなりよばれた。

「真麻！あたしはいつまでもあんたの親友だかね！！」

いきなり教室の前で叫ばれてすごくびっくりした。

「う・・・うん!!」

「ただ・・・それだけ・・・。」

そう言って楓子は教室に歩いて行った。

へんなの楓子。このごろ様子おかしいよなー。まあ楓子も楓子なりの悩みがあんのか。

そう自分の中で片づけて教室にあたしは入って行った・・・。

昼休み。

今度こそ海里にあたしの気持ちを伝えるんだ！

正直に・・・素直に・・・ね。

ちょうどそのとき海里が教室に入ってきた。

「海里!!」

大きい声で海里を呼ぶ。海里はかなりびっくりしたような顔。

「ちよつと来て!!!」

と言い無理やり海里の腕をひっぱる。

「おっ・・・!ちよい、ま・・・あさ!？」

男たちの束のなかからひっぱりだして教室から海里と一緒にでる。

後ろから男子のひやかしが聞こえる。海里があたしの名前を呼んでいる。

あたしはそれを無視して学習室に連れ込む。鍵をしっかりとかけて海里に向き直る。

「真麻・・・?どうした・・・んだ？」

「海里・・・。あたし・・・海里ときまずいままじゃだよ。」

「・・・。。。」

「あたし・・・海里と話さなくなってますごくさみしかった・・・。すっごく悲しかった・・・。」

「真麻・・・。。。」

「海里・・・あたし・・・。」

あたしが言い終わらないうちに海里があたしを抱きしめる。

「か・・・いり!？」

海里はあたしの肩に顔をうずめている。海里の心臓の音が伝わってくる。トクン・・・トクン・・・

「それ以上ゆうな。」

はい?それ以上ゆうなだと?あたしは恥ずかしいのに一生懸命言葉見つけて言ったのに・・・。

「それ以上ゆうな。理性がきかなくなる。」

「へ?」

理性がきかなくなるって・・・でえええええええ!?!なんで!?!あたしへんなこと言ったかなあ・・・。

「お前・・・そんなことゆうとさ・・・。勘違いしちまうだろ?」

「勘違いじゃないもん。」

「え!？」

「ん・・・?はわあああ!!」

なんてこと言っちゃったんだろあたし。そんなことゆうと海里の「好き」って言ってるのと同じじゃん!

でも・・・これがあたしの正直で素直な気持ち・・・。

「ま・・・あさ・・・？」

「海里・・・。あたし海里のことが好きだよ・・・。」

海里が病室からいなくなったときとてもさみしかった。話さなくなつて悲しかった。

放課後あの日・・・。あたしは海里を見てキスをしようと思つていた。

素直に好きつて思えた・・・。。。

「海里・・・ごめんね。いきなり・・・。」

すると唇にとても柔らかい感覚がした。海里の顔が目の前に・・・。

「んん!？」

軽く触れるキスなのにめっちゃくちやびつくりしてるあたしに海里は柔らかい笑みをみせた。

「俺もだ・・・。」

俺もだ・・・つて・・・えええええええ!?!うそ・・・。

「なんちゅー顔してんだよ。」

ははっと笑う海里。

「だつてえゝ。海里がああ。安心・・・っしちゃ・・・ヒック。」

なんか涙がでてきた。安心して素直に正直に想いを伝えられたから。すると海里はあたしのおでこにキスを落としてあたしをぎゅっと抱きしめた。

「く・・・苦しいよお・・・海里いー。」

「いいんだ。じゃないとおめー逃げっちまうかもしんないから。」

「え？」

「夢みたいだ・・・。好きだ・・・好きだ・・・真麻・・・。」

あたしたちはずっと抱きしめあっていた・・・。

く振り返り&報告く

あたしは今、ベッドの上で今日あった出来事を考えている。

「俺もだ．．．．．」

何度も海里の言葉が頭の中でリピートする。いくらなんでも早い展開だよな!?

わあああ。思い出すだけでもはずかしいし．．．。

でも正直に伝えられたし素直になれたしスッキリしている。

夢の中の人に感謝だね

しっかし気になるなあ。夢の中の人って誰なんだろう??

楓子の様子もおかしいしなあ。

うゝゝむ。考えても考えても思い浮かばん!!

するとケータイがなった。

「もしもし?真麻?」

「あつ!楓子?」

楓子からの電話。

「「あんと海里、昼休みから授業ボイコットしたんだって？
なんかあやしいなあ。なんかあつたんだべー？？」」

うつ。さすが楓子。かんよく働くねえ。

そう。あれからあたしと海里は昼からの授業をサボり海里の家で遊んでいたのである。

海里の家にいる間じゅう心臓がバクバクしていた。やばかった。

「まあ・・・つきあうことになりました。」

「「まじでー？！やったじゃん　ってことはー。もちろん海里に
心臓病のことは言ったんだよね・・・？」」

「え・・・。やあ・・・。まだ・・・。。。」

「「はあ！？まだってどうゆうことなの！！」」

うわーん。少し楓子キレぎみだし。

でもすごく言うのを迷った。やっぱりひかれるかもしれないし捨てられるかもしれない・・・。

「「真麻は真麻なりに不安なんだね・・・。でもここまで素直になれたのはすごいと思うよ。尊敬する。」」

「ありがと楓子・・・。。。」

素直か・・・でもあたしはまだ素直になれていない気がする・・・。

「そういえばさー。楓子このごろ様子おかしかったよねー？なんかしたのー??」

「「え!あーっと・・・。あの・・・さ。海里のこと・・・あ!” 田村海里”のほうね。あんたの幼なじみの。」

「やっぱ・・・思い出してないんだよね・・・?」

「はっ!??なんのこと??海ちゃんのこと??
あつ、もしかして昔好きだったこととか?」

「「やっぱいい。なんでもないよ」。今うちお母さんに呼ばれたから切るね。ばいばい。」

「あ・・・うん。じゃね。」

「プツッ・・・」

「んゝやっぱし気になる!!」

「思い出してないってさ。なに?」

「あたしは机の上にある海ちゃんからもらった青いこびんを手にとった。」

「とてもきれい。海が見えるよう・・・。」

「海ちゃん・・・あたしなんか海ちゃんのことまで忘れてることある?」

聞いても答えが返ってこないのが普通。海ちゃん・・・今何してるのかな？

あたしは大切な人ができたよ？？

会いたいよ・・・。。なんて思ってたら海里からなんか言われるかな？

なんて考えているともう１１時になりかけていた。

「もう寝なきゃ！」

あたしは深い深い眠りについた。

くこれまた夢く

「真麻……。」

夢の人だ。あたしね正直になれたんだよ……。

あなたのおかげだよ。ありがとう。

「そつか……。。。。やつと真麻も正直になれるときがきたんだな。」

あれ？ちよつと話し方変わってない？？

「俺も……見たかったな……。真麻の素直なところ。正直なところ。」

へ？？”俺”って……。人が変わった？

「そろそろあのときが近づくころ……。真麻は本当の……。」

本当の……。何？？聞き取れない。もう一回言って……。

「俺はずっとずっと見守ってるからな……。」

とても悲しそうだけれどとても嬉しい言葉。この声の主は一体……？

「ずっとずっと……。。。。。」

そうして声は遠くにまるで霧のように消えていった・・・。。

くこれまた夢く（後書き）

ちよつといままで考えていたことと少し考えを変えたのでつじつまがあわない部分があると思います。がご了承下さい。

これから自体は急展開（？）を迎える予定です

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7823m/>

あい らぶ

2011年10月7日15時16分発行